

# 県がインフル警報

## 流行3週目、感染急拡大

県は2日、県内全域にインフルエンザ流行警報を発令した。昨シーズンと同じ時期で平年並みだが、前週に注意報を発令したばかりで、流行開始の翌々週での警報は過去10年に例がない急激な感染拡大という。県は「気温が低く乾燥した日が続いており、流行は今後も継続する恐れがある」として、うがいや手洗い、外出時のマスク着用など感染の予防や拡大防止の徹底を呼び掛けている。

(佐藤 奇平)

県によると、1月23～29日(第4週)の定点医療機関345カ所からのインフルエンザ患者報告数は、1カ所当たり「34・24」となり、警報の指標となる「30・0」を超えた。患者報告数は前週の2・5倍の1万1333人に上った。

地域別では、相模原市が52・35と最も多く、茅ヶ崎(49・73)、三崎(45・67)と続いた。横浜は32・52だった。川崎市、横須賀市のほか平塚、小田原、足柄上

の各保健所管内は警報レベルは超えなかったが、川崎市が28・96などいずれも注意レベルの「10・0」を超えた。

幼稚園や保育所、小中学校で、29日までの1週間に

インフルエンザで欠席した児童生徒は、前週の4倍に当たる5727人。4校が休校したほか、学年閉鎖が24学年、学級閉鎖は564クラスに上った。

### 患者急増「大変な状態」

#### 対応に追われる医療機関

インフルエンザの流行警報も患者が殺到している。報が発令された。急激な感染拡大で県内の医療機関に「それがどぼつどぼつた」のが先週末から一気に増



診察に当たる羽鳥医師(左)。先週末から一気にインフルエンザの患者が増えたという  
—川崎市幸区のはとりクリニック

え、1日10人を超えるようになった。うちは内科ですが、小児科は大変な状態ですよです」。県医師会公衆衛生担当理事を務める羽鳥裕医師(63)の「はとりクリニック」(川崎市幸区)も、対応に忙しい。

川崎市での流行は1月第3週まで「注意報」に満たないレベルだったが、同4週は「警報」の手前まで急

上昇した。「例年は12月ごろからじわじわ来るが、今季は音沙汰がなかったの

で、油断していた人も多いのでは」。過去10年にな

い増え方だが、原因や背景は分からず、ピークの終息も予想しづらいという。

県内で検出されたウイルスの9割以上は「A香港型」。薬が効きやすく比較的短期で治る型という。「た

だ解熱後も2日休むという基本は守ってほしい。解熱してもウイルスが死滅したわけではないので、すぐ学校や職場に復帰すると、感染を拡散することになる」と同医師は注意を促す。

年齢別では14歳以下が全体の8割を占め、「大人の感染者も子どもと接する機会がある人が多い」。重症化は大人に多く、特に入院に至った例の約3割が80歳以上の高齢者という。

主に幼児が意識障害や異常行動などを起こす「インフルエンザ脳炎・脳症」と思われる例も報告されている。羽鳥医師は「少しでもおかしかったら、すぐに医療機関に連絡を」と話していた。

(佐藤 将人)